みづうみ

昭和31年9月26日　印刷
昭和31年9月30日　發行

川端康成選集

第十卷

（第九回配本）

みづうみ　定價　二六〇圓
地方價　二七〇圓

著者　川端康成

發行者・東京都新宿區矢來町七一　佐藤亮一　印刷者・東京都千代田區神田神保町三ノ二三　塚田重　印刷所・塚田印刷株式會社　製本・加藤製本所

*落丁・亂丁本はおとりかえいたします。

發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七一一一—八番
振替東京八〇八番

目次

日も月も……五
みづうみ……三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

みづうみ

日

も

月

も

光悅會で

京都はしぐれの秋で、今日もしぐれごこちだつた。

大德寺の横を過ぎて振りかへると、比叡山のいただきは薄い雨雲にかくれてゐた。

光悅寺への道をきくために、車がとまつた。

「お父さま、ごぞんじないの？」

「戰爭前に、一度行つた時は、いい日和で、大德寺の孤篷庵の前を出て、歩いたからね。それにもう十年も昔だ。」

父は帽子を宿屋において來た。その頭がきれいに禿げてゐるのを見て、松子は十年前の父の頭を、ちよつと思ひ出す氣持になつた。確かにはおぼえてゐない。しかし、大きく圓いこの頭に、少し毛が殘つてゐるとしたら、むしろ滑稽なやうに、今は思はれる。

さうすると松子は、車をとめたままで、道をきく人の通りかかるのを待つてゐる、運轉手の悠長さが、をかしくなつて來た。

田舍の町はづれのやうな道を、二人づれの婆さんが歩いて來た。

「ここ曲らはつたらよろし。鷹ヶ峰やつたら、お茶會で、こんな自動車がいつぱい行きますがな。」

車の窓から首をひつこめた運轉手に、婆さんはつけ加へた。

「もう、たんねんと（たづねないで）、白壁のお寺に突きあたつたらな、ぢきどす。」

細い道をしばらく行つて、あの寺の白壁の塀に突きあたつた。

「源光庵……。」

松子は寺の名を、さう讀んだ。

そして、この寺の前が、茶會に行く車の「いつぱい」通る道らしかつた。松子たちの車は、ここまで道をまちがへて來た。

光悅寺の入口の前には、茶會がへりの人たちが、田舍風な家の軒下に、かたまつて立つてゐた。しぐれは降りやんでゐるやうだけれども、降りつづいてゐるやうな氣がする。あるひは、雨宿りではなくて、ここで車を待つ人たちかもしれない。

「お父さま、樂さんが立つてらつしやるわ。」

「ええ？」

父は間の抜けた聲で聞きかへした。

松子はもう車の扉をあけてゐて、その人を指すわけにはゆかない。自分が先きに出てから、太つた父のおりるのを助けるやうな姿で待つた。そして歩き出す前に、松子は輕く頭をさげ

たが、ためらひながらだつた。樂さんは自分にあいさつをされたとは氣がつかなかつた。しかし、松子たちが乘つて來たハイヤアをつかまへて乘つて行くらしかつた。

松子は光悅寺の敷石を歩きながら言つた。

「あの太つた方が、樂さんよ。お父さまほどぢやないけれど……。」

「まだ若いんだね。」と、父は言つた。

——今年の春、當代の樂吉左衞門さんが鎌倉に招かれて、圓覺寺に樂茶碗の會があつた。その席で、松子は樂家の當代を見おぼえたのだつた。

廣間の床や机の上に、初代長次郎、二代常慶、三代のんこうから、十二代の弘入、十三代の惺入まで、樂家代々の茶碗をならべて、それぞれの作行の話があつた。また、京都から持參の土で、茶碗の作り方も見せた。樂さんの話し振りは男らしくはつきりとして、聞いてゐて氣持がよかつた。床や机の上に陳列された四五十もの樂茶碗を、貴重な參考品を、大勢の人々が手に取つて、思ふ存分さはるのにまかせてあるのは、松子をおどろかせた。樂さんの人柄かと思つた。それで會が深みのある樂しさになつた。

松子は目に靑葉が痛いほど、眠れない日々の衰ろへもあつたが、かへつてそのために、長次郎やのんこうなどの茶碗の美しさは、みづみづしく見えるやうであつた。そのころの松子は、ちよつとさはられても、泣きさうになるので、手に取つた茶碗は心で觸れるやうに感じられた。松子は愛のかなしみを、半日忘れることが出來た。

圓覺寺での樂茶碗の會は、さうして松子の印象に殘つてゐた。涙を出しはしなかつたけれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ども、その時のどれかの樂茶碗の茶だまりに、涙を一しづく落したかのやうに思ひ出されるのだつた。

松子はしかし人前に出るのを避けて、百五十人ほどの會衆のうしろにひかへてゐたし、人の影にかくれるやうにしてゐたから、樂さんが松子を見おぼえてゐるわけはなかつた。

二

光悅寺の本堂の前の受けつけに、父が會費を拂つてゐるあひだ、松子は白い山茶花を見てゐた。庫裡の玄關脇の山茶花で、大木が卵形に刈りこまれて、花ざかりだつた。

十一月の十三日に、午前十時から、本阿彌光悅の法要をいとなみ、十二十三の兩日、追福の釜がかかる。東京の大師會とともに、名器の出そろふ大茶會として知られてゐる。松子たちは夜汽車の明星で、十三日の朝の五時ころ京都に着き、宿屋で一眠りして、ひる過ぎから出て來たのだつた。

法要はとうにすんでゐたが、松子と父も本堂に參つた。そこから庫裡へ渡つて、庭におりた。濡れた土が庭下駄にねばりついた。庭の中ほどの太虛庵は立てこんでゐたので、奧の騎牛庵を先きにした。

今年の騎牛庵は、光悅會の東京世話人の受持ちだつた。濃茶とは言つても、一日に三百人もの客だから、寄附で點出し、茶席ではお道具を拜見するだけだつた。また、松子の父の朝井は、光悅會に東京から出向いて來るほどの、茶人といふわけではなかつた。娘が稽古をし

てゐるので、一度は光悅會も見せておいたらと、思ひ立つたに過ぎない。
「バレエとお茶とが、戰後のお孃さんの流行らしいね。バレエとお茶とは、おもしろい取り合はせだ。和魂洋才の新しい形かな。バレエで美しい西洋の風をして、お茶できれいな日本のきものを着て……。」と、松子をからかつてみたりする。
しかし、光悅會のやうな大茶會は、まあお茶のお祭のやうなもので、その花やかな人ごみに、茶の心や姿が見られないと思ふのは、思ふ方がまちがひだと、あらかじめ松子に言つておくことも忘れなかつた。娘が胸のみだれを靜めるために、茶を立ててゐるらしいと、朝井は知つてゐたから、天下一の大茶會に來て、かへつて松子が茶に幻滅することをおそれたのだつた。
騎牛庵の寄附で、光悅の孫、空中齋光甫の筆といふ、葡萄の色繪を、朝井は珍らしいと見てゐると、
「お父さま。」と、松子が小聲で呼んだ。たて出しの茶碗が手早く運ばれてゐた。
茶室は前の客がはいつてゐるので、朝井は松の木蔭に待ちながら、裏手の山を振り向いたが、
「おや。禿山になつてゐる。戰爭で伐つてしまつたのかな。」と、氣がついて言つた。
圓みをゐがいた姿のいい二つの峰、光悅も朝夕にながめた小山である。戰爭の前に來た時は、美しい線につつまれてゐたやうに思ふ。その二つの峰を、鷹ヶ峰、鷲ヶ峰と呼ぶとも言ひ、また、この光悅寺のある丘が鷹ヶ峰だとも言はれる。光悅が營んだ藝術村はとうに滅び、

今のは寺も茶室も古くないのだが、二つの圓い峰も、今また裸にされてしまつてゐた。

山二つかたみにしぐれ光悅寺、日かげればしぐれや來しと仰ぐ峰、といふやうな句もあつて、禿山にしぐれてゐるのかゐないのか、朝井は掌をひろげてみてもわからぬほどだつた。その二つの峰のはざまに、妙な小屋が立つてゐた。

「マンガンを掘らはつたんどつせ。」と、茶の師匠らしい女が教へてくれた。

前の客が出るけはいで振り向くと、茶室の右手の山のはづれに、遠く京の町が見えた。

順序もなく四五人目に、松子は父の後から席へはいるなり、薄暗い床に浮ぶほの明りのやうな、伊賀の花入れの色に、あつと吸ひ寄せられた。神秘な青貝が海の底に光つてゐるやうであつた。水に濡れて、妖しいほど艶めかしい。伊賀の青蒲黃色の釉藥が、あたりの薄暗さのために、なほ水色がかつたつやを深めてゐるのだつた。近づくと、その裾に灰色の焦げも水を帶びてゐた。耳つきの立ち姿も強く爽かだつた。

掛け物は寸松庵色紙、山里は秋こそことにわびしけれ、の歌だつた。釜は東山殿お好み、光信下繪、松の繪の蘆屋だつた。茶碗は光悅七種の雨雲、松子もその名を聞いてゐる、光悅の手づくりの黑樂で、廻つて來るのを待つて、松子はよく見ておかうとしたが、席の薄暗い上に自分の影で、黑ひまに藥が流れて雨雲を思はせるといふ景色なども、十分には見られなかつた。茶杓は空中齋の共筒、八十二歲の作といふ細かい彫り銘は、やはり見づらかつた。茶入れは中興名物、水指は雲州藏帳、結構な品ばかりだが、松子は床の花入れに目がゆきがちだつた。少し薄暗いなかでは、伊賀のびいどろ藥の肌色ほど、美しいものはなかつた。

白椿を入れた、その青い螢火のやうなつやに、また見とれてゐると、膝の前へ砂張の建水が廻つて來て、松子はうつかり手に取つた。
「お手の油がつきますと……。」
次客が松子にささやいた。主人の席にゐた世話人が言つた。
「いいえ、よろしうございます、どうぞ……。後で拭きますから……。」
砂張は指の脂がついてもいけないし、固い布で拭いて、こすり目がついてもいけないのだつた。

三

太虛庵は今年、名古屋世話人の受け持ちになつてゐた。
竹を折り曲げて結んだ低い垣、いはゆる光悅垣のそとで待つてゐて、
「裏千家の御次男がいらしてるわ。」と、松子は父に言つた。
「よく知つてるんだな。」
「(淡交)の寫眞で見てますから……。」
しかし、松子はその人の後姿を見送るうちに、ふつと口をつぐんで、父の陰にかくれるやうに身をひいた。
裏千家の次男とすれちがつて、こちらに來る、背の高い青年は、松子をみとめたらしく、ちよつと立ちどまつたが、思ひ直したかのやうに、つかつかと近づいた。

「珍らしいところで……。」
「お父さま、高谷さんよ。」と、松子は言つた。父に知らせるあひだに、自分が落ちつかうとするかのやうだつた。
「ああ。」
父は高谷よりも娘が氣にかかるのか、それとなく松子をかばふやうに立つて、高谷に禮を返した。
「ちやうど京都へ來合はせてゐたものですから……。」と、高谷は濃い眉を上げて、
「東京から、わざわざ見える人も多いんですね。」
「あなたは一人……?」と、朝井はゆつくり言つた。
「はあ……。」
高谷は答へをそらせた。
「玄琢の席は、おすませになりましたか。これからですか。私は道順で、先きに寄つて來ましたが、よろしかつたら、お送りします。」
「いや、ありがたう。」
太虛庵の床もまた、伊賀に白椿のつぼみが入れてあつた。升色紙がかかつてゐた。しかし、松子は高谷幸二に會つた心空で、その歌も讀めなかつた。片身替りの伊羅保の茶碗を手に取つても、よく見えなかつた。落ちつけないでゐながら、そとに幸二が待つてゐさうなので、席を出ることもおそれた。

やはり幸二は待つてゐた。
「また、しぐれて來ました。お送りしませう。」
松子は父の顏を見たけれども、幸二の車がそこに來てゐた。
父の後から乘らうとすると、座席のうしろに、女の派手なショオルとコオトの投げかけてあるのが見えて、松子は立ちすくんだ。幸二が扉の脇に待つてゐる。松子は幸二に向けた方の頰から、燒きつく痛みが來た。背を女のものに觸れないやうに、松子は前へ浮き出して坐つた。
玄琢の土橋別莊は直ぐだつた。
「それぢや、私はここで失禮します。」と、玄關で幸二は言つた。
「宿屋の車ですが、お歸りにお使ひ下さい。」
「いや。歸りに、大德寺まで歩きたいんで……。どうもありがたう。」
「でも、降るといけません。私は連れの車がありますから、どうぞ……。」
幸二は車を朝井に押しつけるやうなしぐさで、二三歩さがると、初めて松子をまともに見る目に、愁へを浮べた。
「御機嫌よう。」
松子は目を伏せて言つた。
「幸二さん、お車のなかのお荷物……?」
「あつ、さうか。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook